

8-1 松本城クイズ29 城下町の武備等について(解答・解説)

松本城管理事務所研究室

1. 江戸時代の城下町は、城主によって計画的に建設・造成された人工都市であり、身分別居住が強制・固定された封建都市といえる。また、敵に容易に城郭が攻められないように城下町にも防衛施設を施した□□都市でもあった。□□にあてはまる言葉を次の中から一つ選びなさい。
 ②

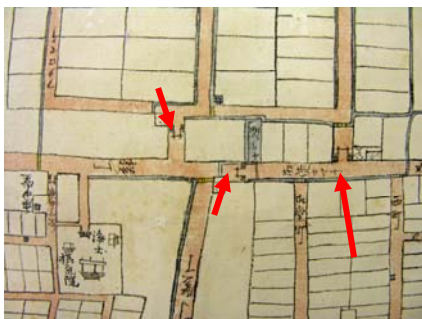
軍事都市。城主は軍事的要塞・政庁・居宅を兼ねた城郭をつくり、曲輪（きるわ）内は上級武士を、その周辺部には下級武士の屋敷を配置した。さらに武家地の外辺や街道筋には職人・商人を集住させた。さらにその外には寺社地を配して防衛上の前線基地とした。いわば**軍事都市**といえる。

2. 城主は、城郭をつくり、郭（くるわ）内には上級武士を配し、周辺に中下級武士の屋敷を設置した。武家地の外辺や街道筋には職人や商人を集住させて□□□を形成した。□□□に入る言葉を一つ選びなさい。 ③

松本城下町も武士と町人の別住がはっきりとしている。武家地は、城郭内と郭の外から北部一帯に広がっている。城下の北東部に集中していると言ってよい。これに対して**町人町**は、北国脇往還（善光寺街道）沿いに配置され、城下の南・東部に位置している。



3. 武士と町人は分離居住の原則が厳しく守られ、その町境には、下の絵図のような施設が造られ、双方の通行は規制された。この施設とは何か、次の中から一つ選びなさい。 ①



城下町の防犯や治安維持のための施設として、町の要所、武家地と町人地の境、在方（村）と町方の境、町と町の接点等に**木戸**（木造）が建てられていて、それに隣接して番人が詰めている番所が置かれていた。木戸は外敵の侵入や不審者の出入りを警戒し、それを防ぐための警備施設であった。木戸は一定の時刻になると閉められて通行人は遮断されてしまう。明け六ツ（午前6時）に開けられ、暮れ六ツ（午後6時）に閉まるのが通常であった。

4. 「 . . . 天正13年よりは、市辻（のちの地藏清水）・泥町（のちの柳町）の町屋を本町に移転し、東町・中町の町割りをし、麻葉町（あさば）を安原町、西口を伊勢町と改称して道路を整備し、家屋を建て続けた。 . . . 」(信府統記)。さてこの城下町整備計画を進めた人は次のうちの誰か、一つ選びなさい。 ④

天正10年（1582）7月、小笠原長時の子**貞慶（さだよし）**は、叔父で城主の小笠原洞雪（どうせつ：貞種）を深志城から追放して、城郭を拡張・整備し、城下町の基本を組み立てた。

5. こうして城主の変遷とともに城下町の整備は続けられていった。水野氏の時代によりやく整備され、城下町の姿がはっきりしてきた。およそ何年間かかったことになるでしょうか。次の中から一つ選びなさい。 ③

小笠原貞慶の城下町建設（城下町の基礎づくり）1582～1590年、続いて石川数正・康長の片端、袋町、葵馬場に武家屋敷等の建設（1590～1613年）、そして小笠原氏・前戸田氏・松平氏（1613～1638年）の建設をして、城下と武家地の拡充・整備を進めた。ついに水野氏の時代（1642～1725）になって、城下はほぼ整備され、城下町の姿がはっきりした。**約140年間**かかって整備されたことになる。

6. 7城下町にはさまざまな敵の侵入を困難にする防御施設が設けられた。そのさいたるものが道路であった。城下にも侵入した敵を一気に城郭に至らないように道路の付け方を工夫してある。次の絵図の中のA～Dの道路の付けかたを何と呼ぶか、あてはまる番号を入れなさい。

A (2)

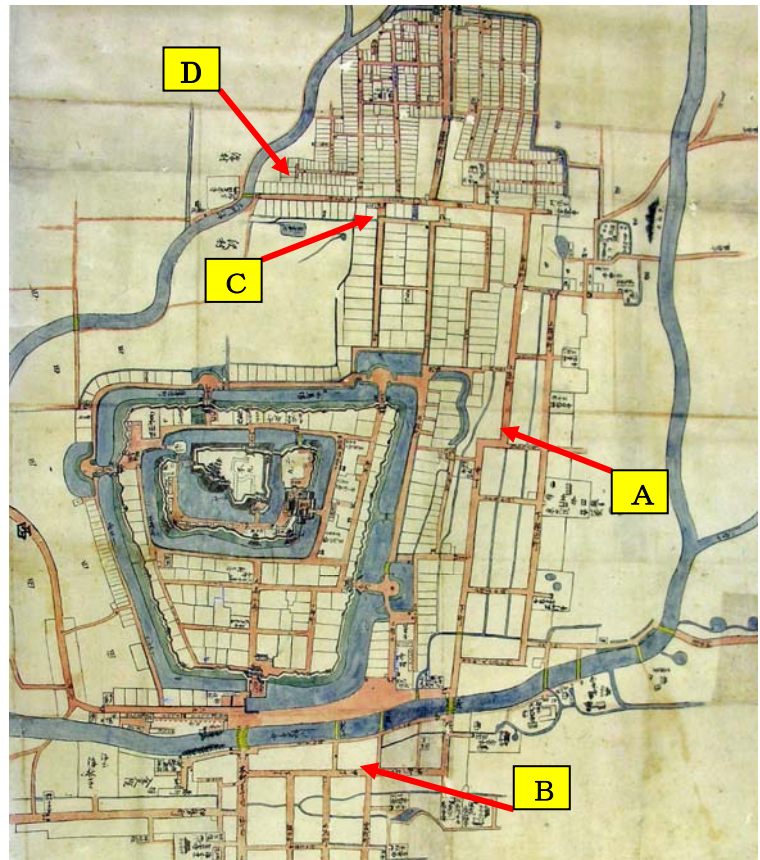
B (4)

C (1)

D (3)

- 1 丁字路 (ていじろ)
- 2 鉤の手 (かぎのて)
- 3 袋小路 (ふくろうじ)
- 4 喰違 (くいちがい)
- 5 鍵曲り (かぎまがり)

※ この採点は、一つ5点です。



8. 城主の城下町建設にあたって、寺社は城下の周辺に集中した。図をみてもわかるように、町人地を取り囲むような形で配置してある。宗教勢力の統制と城下防衛の役割と機能をもっていた。寺社地がこのような形で配置されることを何と呼ぶのか。 ③

寺社が城下の周辺部に集中していて、とりわけ町人地を取り囲むような形で配置されていることを「**城下囲い**」という。近世城下町に多く見られる形である。

9. 城下町の防犯や治安維持のために、武家地と町人地の境、町と町の接点、在方と町方等の区分をして、外敵侵入の警備にあたった。それに隣接して人が詰める口口があった。さてこの施設を何と呼ぶか、次の中から一つ選びなさい。 ①

番所である。木戸と隣接して番人が詰める木戸番所、町番所、同心番所などがある。武家地には別に辻番所があり、士分の者が詰めていた。

10. 右の絵図は天保6年(1835)のものである。このあたりをみると川や堀、木柵(さく)、土手、番所、木戸、狭い橋、広くない道幅などが集結していて、さながら城下に入る関所のようなものである。現在この場所はどこの場所にあたるか、次の中から選びなさい。 ②

絵図によって若干違いはあるものの、余り相違はない。本町5丁目と博労町の境に位置した。現在の**緑橋付近**にあたる。

